第410号 昭和54年8月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

1979年（昭和54年）
8月号（No. 410）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

チョモランマ登山計画について
（渡辺兵力）……（1）
ヒマラヤをめぐって
——最近の情況——（片山全平）…（1）
報告
剣岳発見の錫杖を囲む夕べ……（2）
第2回講演会　（科学委員会）…（3）
自然保護情報……（4）
東西南北……（5）
図書紹介……（6）
図書室だより　（図書委員会）…（6）
キシュトワールへ　（学生部）…（7）
お知らせ
第22回紅葉会案内……（8）
第383回ルーム小集会……（8）
追悼……（8）
ルーム購入収支報告……（9）
会務報告・ルーム日誌・会員動向…（9）
カット／梅谷隆一・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

▶事務室及び図書室の休室期間
8月10日(金)～8月16日(木)

チョモランマ登山計画について

渡辺兵力

かねて、会報等で御承知と思いますが、JACでは日中国交が成立して以来、いまだ知らざる中国の山々への登山を実現したいという気持から、登山計画を練り、また各方面への働らきかけの努力もしてまいりました。一昨年の秋、西堀会長が、日中文化交流協会の御斡旋で体育関係の方々と訪中されたのも、その努力の一つであります。その後、日本山岳協会の御推薦の書面とともに一九八〇年にチョモランマ峯への登山計画書を提出いたしました。すでに新聞紙上(七月十四日)で御覧のように、意外に早く中国から登山許可が参りました。このことはJACとしてはまことに喜ばしいことと考えます。諸般の事情で七月の定例理事会が一週間おくれましたが、十六日の理事・評議員合同の会議において、この計画を全力をあげて押しすすめることがきまったことを御知らせいたします。会員諸兄も御同感と存じますが、今回の登山は、独り国内の登山界だけでなく、全世界の登山界が注目しております、たいへん重要な山登りであります。今後、この計画に参画いたしますものといたしましては、このことを十分に心して臨みたいと考えておりますので、会員諸兄の御理解と御協力をお願いいたします。中国からの許可書面では、七月中に日本側から細かい点の打合せのために訪中してほしいということが示されておりましたので、理事会では、渡辺副会長が訪中することにきまりました。許可書の内容だけでは具体的な登山計画には全く着手できない状況でありますので、実際的な計画の第一歩は、七月の訪中後となります。北面からのチョモランマは五、六月が唯一つのチャンス期だときいております。諸準備にはたいへんな努力が必要な状況下の仕事でありますが、JACの輝やかしい歴史と、社会的責任を考えますと、八千米の峯を登る気持で、協力していかねばならないと思います。なお、この計画の正式の名称は、「日本山岳会チョモランマ登山計画」（略称JQE一九八〇）と呼ぶことになりました。

＊渡辺副会長が中国から帰国されましたら、会報を通じ会員諸氏に報告して頂く予定です。

ヒマラヤをめぐって
——最近の情況——

片山全平

植村直己氏の訪中

ヒマラヤ登山はさておき、まず、植村直己氏が、中国登山協会の招きで訪中、六月十七日夜、西堀会長らの出迎えを受けて帰国、その成果を速報としてお伝えする。

植村氏が会った中国登山界の要人は喬加欽、史占春、許競、王富州らの諸氏である。喬加欽氏は中国登山協会主席で、チベット自治区革命委員会副主任（革命委の官職名は漸次廃止されるはず）を兼ねており、史占春氏は同協会副主席であった。西堀会長訪中当時、同氏は協会責任者として応対されたようで、最近の登山界の情勢に対処して協会内の人事整備がなされたものと思われる。

登山問題については①中国人による登山計画は「四つの近代」遂行のため、一九八二年まで中止（今年は建国三十周年にあたり、K2登山が計画されていたが、植村氏は計画中止の感触を受けている。中国との合同登山

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

◎お知らせ——

第12回図書交換会

恒例の山岳図書交換会の日程が左記の通り決定しました。多くの会員のご協力を期待しています。

日時　10月27日(土曜日)午後2時
場所　日本山岳会ルーム

山の本・雑誌をご出品頂ける方は、10月10日までに「出品書籍名希望価格・会員番号・住所・氏名」をそえて図書委員会までご連絡を。

報告

剣岳発見の錫杖を囲む夕べ

明治四十年の七月、測量目的で越中剣岳に登頂した柴崎芳太郎測量官ら一行は、当時前人未踏と信じていたその山頂から、錫杖と鉄剣を発見して持ち帰った。これは、宗教登山から測量登山へ、そして近代登山へという登山史の流れのなかで発見された出土品としてきわめて注目を集めた。

その後、この錫杖は奈良朝末期か平安朝初期の作と鑑定され、昭和三十四年には国の重要文化財に指定された。

また最近では、この剣岳初登頂を素材とした新田次郎氏の小説が発表されたり、地元で錫杖の模造品が土産物として発売されるなど、この事件に対する人々の関心が高まっている。

なお、この錫杖は、柴崎芳太郎測量官のご子息である柴崎芳博氏（東京・杉並区在住）が保管されているが、現在、地元富山県の博物館へ寄贈の話がすすめられており、やがてそちらへ移管される予定である。

＊

図書委員会は、この機会に日本山岳会の有志でこの錫杖を拝観しようということを企画し、三月二十七日午後六時三十分から、「剣岳発見の錫杖を囲む夕べ」を開催した。

当日は、柴崎芳博氏にも直接ご出席をお願いし、この錫杖にまつわる話や、父芳太郎氏のことなどについても語っていただいた。

なお、この錫杖が日本山岳会に出品されるのは今回が二度目であり、最初は、発見の翌年の明治四十二年五月の第二大会に出品され、観覧者の注意を惹いたということが報告されている（『山岳』第四年第二号）。

剣岳山頂発見の錫杖と鉄剣およびその重要文化財指定書
（滝川清氏撮影）

青銅造りのこの錫杖は、まだ大部分青緑色を残しており、高さ十三・四センチ、幅一〇・九センチと、形は比較的小さくかつ素朴なものではあるが、実に精巧に鋳造された美しいものである。また当日は、この錫杖と同時に発見された鉄剣も併せ出品していただいた。こちらはかなり錆がひどく、やっと原形をとどめるような状態であった。

来会者は柴崎氏の話に耳を傾けながら、長い歴史と謎を秘めたこれらの出土品を実際に目にし、いい知れぬ感動をもって順次拝観していった。

この錫杖の発見経過は「越中剣岳先登記」（『山岳』第三年第三号）に詳しい。しかしこの記事は、登頂者らの直接手記によるものではなく、これを報じた地元の新聞の切り抜きを登山史上特筆する価値ありとして掲載したものであった。のちに、この記事の内容をめぐって、研究家の間で異説、疑問が提起される端緒となったものである。

疑問点の中心は、主として、錫杖発見のときの登頂者らは誰であったのかという構成メンバーの問題であり、なかでも、のちに名ガイドとして名をなす宇治長次郎が、そのなかに含まれていたかどうかという点である。

ヒマラヤをめぐって

珠穆朗瑪をめぐって

西堀会長について、植村氏の訪中は、日中両国の登山界をさらに接近させたといえる。最近中国は一連の科学調査からエベレスト周辺の詳細な地図も製作され、それには「珠穆朗瑪」の中国名を明記している。この文字が初めて地図上にあらわれたのは清朝時代に作られた「皇輿全覧図」である。インド測量局による劇的なエベレスト発見（このエピソードは否定されても中国側は考えていない）②外国登山隊の受け入れは前向きに考えられている。エベレストは日本隊優先、西独のゴサインタンはすでに許可交付、ただし期間など未定③崑崙、天山は踏査未了で、外国隊の受け入れはない。

以上が骨子であるが、外国登山隊受け入れのため、登山料、宿泊施設、輸送（トラック、人夫）の整備、および規約の準備がなされつつある（今春の許競氏のネパール訪問は登山事情の視察であったと思われる）。

ついで植村氏は、北京――成都（一泊）でラサ入りし（飛行機で正味五時間半）、在住するエベレスト登山隊員と、ラサ周辺の四〇〇〇メートル峰に登り、チベット人農家に〝民泊〟、おおいにラサの休日を楽しまれた。

西堀会長について、植村氏の訪中は、日中両国の登山界をさらに接近させたといえる。最近中国は一連の科学調査からエベレスト周辺の詳細な地図も製作され、それには「珠穆朗瑪」の中国名を明記している。この文字が初めて地図上にあらわれたのは清朝時代に作られた「皇輿全覧図」である。インド測量局による劇的なエベレスト発見（このエピソードは否定されている）をさかのぼること百五十年になる。威風を誇った清朝の康熙、乾隆時代の版図が現代中国の原型ともいわれるが、その康熙帝（一六五四年～一七二二年）が、当時中国に渡来、布教につとめていた仏宣教師グループに命じて中国全土の地図作りに取り組ませた（一七〇八年＝日本の宝永五年）、約八年で全図をまとめ、続いて、その一人レジス師に韃靼、朝鮮、チベットの地図を測量させ、これをフランス本国に送って製版させた、という。

一九二一年の英第一次エベレスト偵察隊が派遣されるとき、その周辺の地図はこの皇輿全覧図が唯一のものであったと、J・N・コリーが述べている。また同隊の測量成果を発表したダグラス・フレッシュフィールドは「およそ地名というものはその国の名称をつけるのがルールである。エベレストはそのルール違反で、少なくともチベット名のチョモルンマを付記しておくべきだ」とつけ加わえている。

そのエベレストに、ことしユーゴの二隊員が西稜から登頂した。東欧登山家としては、昨年のポーランド女性、ルトキエビッチについで三人目、通算八十五人となる。国別ではシェルパ（タマン一人を含む）17、チベ

当日の柴崎芳博氏の談話の内容も、この問題を中心にしたものであった。柴崎氏は、最近、過去に発表された文献類を読みなおしたり、父上の周辺に残されたものを調べなおしてみたが、依然通説に対する疑問は残るとされ、関連した文献や資料を示されながら、具体的に語られた。

その内容を要約すると、①父からは長次郎が登ったということは何にも聞いた記憶はないし、記録もない、②報告文のなかには長次郎の名前は何処にも出てこない、途中落伍者一名の記録があるが、それが長次郎ではなかったのか、③山に対する特別な信仰心を持っていた長次郎は、霊山の先登を嫌って、故意に落伍したことは充分考えられる、④二年後の明治四十二年の吉田孫四郎氏一行の登頂記（『山岳』第五年第一号）に現れる長次郎に関する記事からも、長次郎の落伍は推測される、とするものであり、柴崎氏は、長次郎が剣岳の第一登頂を成し、錫杖を発見したという説についてはなお疑問があるとされた。

そしてこの錫杖を博物館に寄贈するにしても、できるだけこれらの疑問点は明らかにしておきたいと結ばれた。

当日出席されていた登山史研究家の山崎安治氏は、これらの重要な歴史的事実が、いたずらに歪曲、着色されることがあってはならないと警告され、柴崎氏に対し、将来のためにも、その研究の結果を権威あるものに記録、発表されるよう進言されているのが注目された。

また当日は、柴崎氏から、この事件の重要な関連資料でもある『点の記』（越中国三等三角点之記）の写、『三交会誌』（陸地測量部三角科の部内誌）および父上の原稿、手紙、地図類多数が出品され、来会者の関心を集めた。

重要な文化財や資料をご出品していただき、貴重なお話しをしていただいた柴崎芳博氏にあらためてお礼申し上げる。（松家 晋）

（来会者）三田幸夫、織内信彦、山村正光、滝川清、板倉勝正、内藤憲吾、辻荘一、大森久雄、伊藤博夫、山崎安治、近藤信行、河野悠二、今村正二、濱野吉生、小倉厚、斉藤桂、岡沢祐吉、森川洋佑、岩瀬晧祐、菅野弘章、久保一陽、横山厚夫、藤沢乙三、島田巽、武田満子、越田和男、冨田美知子、松家晋。

報告

〝私の山と学問と〟

今西錦司氏講演会

科学委員会の第二回の講演会として、去る六月一二日の夕方、私学会館で、今西前会長をお招きして表題のようなお話を伺いました。今西さんは、長期登山計画の実践でたいへんにお忙しく、JAC依頼の仕事はとび入りのため、開会一時間前に上京され、閉会直後に帰洛されました。小一時間のお話のあとの質疑応答が佳境に入ったところで時間切れになって残念でしたが、一〇〇名に近い方々がお集りになり、なごやかなムードの楽しい会でした。お話の内容はいずれ「山岳」にまとめる予定でおりますが、とりあえず、講演の要点をまとめて、お知らせいたします。

＊

私は、話は苦手だが、今日はJACの内々の集りだから、京都弁のまま浴着がけ杯一気分でお話したい、というお断りからはじまった。

「山と学問と」というテーマはあまり考えたことがないが、私にとっては学問より山の方が先であった。一体何故山登りをはじめたかはさだかでないが、結局「生れつき」あるいは私は突然変異で山に行きだしたのだ、と思っている。生物学への第一歩は三高時代から

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

ヒマラヤをめぐって

ット9、西ドイツ8、アメリカ7、オーストリア、日本、イタリア各6、英、スイス各5、インド4、仏、中国各3、ユーゴ2、ニュージーランド、韓国、ポーランド各1（シェルパのナワン・ゴンブは二回登頂しており、総計八十四人）。

各国登山隊の活動

ネパールのヒマラヤは、今年は、同国の登山再開から十年目にあたる。この十年間の登山展開はかなり異ったものになった。その傾向はますます押し進められるが、まず、英ダグ・スコット（三七）とペーター・ボードマン（二八）のエベレスト南西壁登頂組が、酸素補給器も携行せず北稜の新ルートから五月十六日カンチェンジュンガ（八四六二メートル）に登頂した。四人の小パーティでのこの壮挙。一九五六年の南稜からの登頂は一・五メートル下で中止し、住民の信心を裏切らなかったエピソードを回想させ、住人も登法も、時の流れを感じさせる。

中ネ国境にまたがるガウリサンカール（七一五〇メートル）に、この山の開禁を期して米ネパール合同隊（ウイリアム・アルバート・リード隊長）を組織、五月八日ジョン・F・ロスケリー（カメラマン）とシェルパのドルジが南西壁から初登頂した。ロスケリーの話では西稜ルートは不可能であったとか。

日本人初のアンナプルナ主峰（八〇九一メートル）登頂は静岡県ヒマラヤ登山隊（八木公信隊長ら十一人）。五月八日、田中誠三（三一）とシェルパによって山頂に立った。これで、ジャイアンツの日本人未踏はカンチェンジュンガ、ローツェ、チョーオユーの三峰である。

このほかタムセルク（日本エクスペディションクラブ、山崎金一隊長ら七人）の木村智、細貝栄両隊員の登頂（4月28日）、カンテガ（山学同志会、湯田一男隊長ら五人）の石橋真、竹内孝一両隊員の登頂（4月21日）、ニルギリ中央峰（松山商科大、青木正樹隊長ら七人）の阪田興一、津田泰男（4月30日）、浜田俊郎、神山潤一（5月1日）の四隊員の初登頂。また外国隊はP29南西壁、アンナプルナ南峰のポーランド隊、アマダブラムのアメリカ隊がある。

ことしは日本六隊を含め、十一カ国から二十二隊。アンナプルナ主峰（フランス）、ダウラギリ主峰（スイス、フランス合同）のスキー滑降という部門も進出し、遭難死者八を出した。

だが、生物学での有名な方法論争であった機械論か生気論かには興味がなく、私はむしろ全体論（ホーリズム）の立場をとってきた。山登りをしていて、「山」とは一体何かと問うとき、頂上は山の顔のようなもので、だからやはり下から頂上までたどりつき、それによって山全体の持ち味を知る必要があると思う。これは私が全体論信者であるからかもしれない。

機械論は今日の科学一般の基本的方法とされているが、こうした還元主義あるいは分析法では〝もの〟のオリジンというものは解明できないのではないか。水をH_2Oとしてとらえる方法は、それによって水の構造と機能を知ることができても、HとOとが結びついて何故に水になるかという問題は解らない。進化論はこのオリジンを究明しなければならないので、機械論では駄目だと考えてきた。

先々月、梅棹さんたちの「科学生産の技術」という会に呼ばれて話をした。そのときに、私の方法論の基本は「直観」だと述べた。ここにいう直観とは洞察といってもよい、かなり神秘的な性質のものである。たとえば、薮山で二つの全く同じ状態の道の分岐点に出会ったときは、理性的判断は手が出ないだろう。そのとき直観的判断で、山頂へ通ずる道は右だと判ることがある。とはいえ、直観が常に正しい判断をするとはいえない。経験で直観の失敗率をさげられるが、それは零になるものではない。直観とは体全体で受けとめるものだろう。

今日、人間はあまり理性にたよりすぎていると思う。私が直観を重視する理由の一つは、人類が理性を獲得したのは（言語能力の獲得）はここ十万年来のこととといわれている。それ以前には何に頼っていたのか。おそらく直観に頼っていたにちがいない。最近、人間はしゃべりすぎの感がある。言葉の使用におぼれているのではないかと思う。要するに、自然を対象とする場合には、人間もある程度アホになる必要があるのでないかといいたい。いいかえれば、己を無にして自然に向う必要があると思う。私の山登りの経験からもそういう場面があった。

私の学問の基本理論に「すみわけ」というのがあるが、この「すみわけ」の発見は、五年間も鴨川の石をひっくりかえしてカゲロウの幼虫の観察をつづけていたところ、ある日突然、「すみわけ」の発想が湧いた。カゲロウの一匹一匹がちがう事実から「種」（スペシース）とは一体なにかを考えつづけていたときだった。そうしたとき、「すみわけ」によって種のあり方が理解できるようになった。そして種と個体との関係の表現の仕方について考え抜き、遂に、「種と個体とは二にして一のものである」という言い方になった。これはあらゆる生物はその祖先からこの約束で存在しているということである。生物の起源は小数でなく、沢山の個体＝種から出発した。そして、もう一つ、私の進化論を要約すると、「全ての生物は変るべくして変った」という表現になる。

私は人類の起源の究明を課題として、日本猿から類人猿の観察へという方法をやってきたが、結局はっきりしなかった。そして「人間の赤坊はどうして立つか」を問う方法に転換した。家内はこの問いに「赤坊は勝手に立つのよ」と答えた。ここに「変るべくして」という表現しかできないという考えになった。これまでの進化論の考え方、たとえばラマルクの要不要説とか、適者生存説などの理解の仕方には無理があると思う。人間は元来功利主義的思考をするものだが、この考えを逆転して見なおしてみる必要があると主張したい。

今西さんは山岳学というものを主張されていたが、今は、あえて山岳学の存在を主張しない、というお話だった。　＜科学委員会＞

自然保護情報

島々谷川の道
――建設と破壊の谷――

小林俊樹

信州安曇村島々の宿から「島々谷川」ぞいに上高地へたどる、六里（約二四キロ）の峠道がある。「トクゴ」あるいは「トクゴウ」と人々は呼んでいる。この峠を越えなければ、穂高にも会えず、上高地の秘境を探ることもできなかった、多くの山人たちが踏みこんだ道である。

昭和八年に、中の湯から安房峠への道と別れる、現在の上高地公園線の釜トンネルが開通してからも、廃れはしてもやはり多くの山好きが歩き続けた道である。

当然のこと、この峠道のことを綴った文章も、ウエストンの「日本アルプス登山と探検」以来、きわめて多い。

その峠への道が、というより「谷川」沿いの径を歩きながら味わう、あのすばらしい幽谷の風情が、悲しいことに、年ごとに失われる運命に、今晒されているのである。

歌人窪田空穂がかつてそこに、南画の風趣を感じたという、その深く涼しく静かな緑陰の谷が、やがてコンクリートの堰堤のいくつかによって分断されてしまうというのである。

それというのも、すでに二俣（ふたまた）（島々宿から約二時間）の地にできた、建設省による砂防堰堤（昨冬から今春にかけて工事は行われた）を第一として、次々に渓谷破壊の工事が進められるというからである。

それが、どういう経緯で始められたのか、関係機関相互の話し合いはどうなっていたのか、数々の疑問を含めて、その間の事情は何一つ一般には知らされていないのである。

昭和二十年十月、あの終戦直後の集中豪雨によって、手ひどい被害を受けた島々宿の人々にとっては、渓谷破壊にはかえられない安全の保障ではあろう。だが、それならば何故、災害後三十数年間も放置されたままであったのか。しかもその間、大水の被害は殆どなかったと聞いている。そして今年、突然のコンクリートの出現を見たのである。

第三十三回ウエストン祭の記念山行に参加して、この工事の現状を見せつけられ、唖然たる気持になったのは、一人筆者ばかりではあるまいと思う。

この谷をたどり、この谷の歴史を憶う多くの人々にとっては、惜しみてもあまりある渓谷美の消滅なのである。

第十七回 木暮翁碑前懇親会記

五十年前に野口末延さんと木暮理太郎さんの御手引きで入会し、昨年末に永年会員にされましたので、先ず木暮さんに報告いたさねばと野口さんのお伴をして参会しました。雨に見舞われる日が多かったそうですが、五月十九・二十日とも晴れて、潤葉樹林の若葉はやわらかく美しく、四十数年ぶりに訪れた金山の周囲の山姿は、三峰川の奥に暮している私にとって懐しく、山肌のきめの細さ、花崗岩の間をくぐって来ただろう水の清冽さに私は見ほれました。定刻四時、参会者四十六名、碑前にぬかずき、つづいて最長老の山崎金次郎さんをはじめとして、翁にゆかりのある方々のお話しを時折り聴える野鳥の声を伴奏にして承った。

木暮さんは明治二十九年の夏に、針木峠から立山に、そして槍ヶ岳・乗鞍・木曽駒・甲斐駒を総なめにして金峰山の頂上に現われて「初めてしみじみと山を味ふことを体得した」と会報（昭七・七）に記るされておられる。

木暮さんの印象は或る時、市電の停留場でお目にかかった時、立ち話しでのヒマラヤ談だ。何回か野口さんに連れられて本郷のお宅に伺った時は大先達の前にかしこまって膝をくずすこともならず、しびれを我慢して、お話しの中味は記憶に残っていません。

薄暮、山梨支部の皆さんの肝入りで有井館の広間に設けられた席で懇親会が催された。一杯、二杯と御酒が入ると、皆さんが旧知の如く話がほぐれてくる。名指されて話しをされる方のお話しも碑前の時とちがってくだけて来る。ナンダコートの勇士H君など声涙ともの話しぶり。はるか仙台から参加された柴崎さんからは木暮さんの仙台時代のお話しを承った。

翌日は皆さん夫々に登る方、寛ぐ方、私は野口さんと対岸の尾根に籔をくぐって登り、秩父の山の新緑の香りを腹一杯吸って参りました。

この集会設営に並々ならぬ御骨折、お気づかいをして下さった山梨支部の方々に心から厚く御礼を申し上げます。

（交野武一）

斑尾高原山菜行道草の記

遠くは草津白根より志賀、岩菅、苗場、鳥甲　新潟の山並を、足下は斑尾の数々の尾根が、飯山の盆地を覆う。後方は斑尾山より妙高、焼、雨飾　なんと豪華版な大パノラマ、それが終日眺望できるのだ。グラスを傾け、月夜の外観を楽しむ、八方尾根と比するは、愚である。アルペンポスト、ペンション。主は雪焼けの健康美と都会的センスの持主長谷川富士子さん。夫君は日航の部長さん、コマメに内助？　朝食後仮眠で体調を補整し、斑尾山頂へ（一三八二M）。登高中、道が断えたり、藪こぎもあり、スキー場脇に出る。これより直登のみ。最終点のリフト台地で、私はカメラアングル捜し、網蔵ジュニア、同行の田中、小島氏が頂上へ（頂上後方飯綱、戸隠より黒姫妙高連山、足下は信濃町、野尻湖）。前夜の降雪、風と寒さで、下山を急ぐ。帰路後続の高田、岩堀氏と合流、夕食は網蔵氏の長い挨拶で乾杯、進藤、小島両氏の歌が断えない。栗原氏は早くもダウン、早暁高声シキリ。第三陣の片岡氏を囲み、アルコール同行会（前夜十二日、渡辺公平氏の通夜に出席されたので）朝食前に、ウイスキーを傾ける。某地点までジープで送られ愈々山菜行足元は確か也。アケビのつる、イタドリ、ハンゴンソウ、トリアシ、ニワトコ等々妙高の連山を前に水芭蕉のある池の端で中食、片岡講師は説明をし乍らマクロレンズ付きの愛機で多撮ご多忙でした。これぞ道草の本領。ペンション村に近づくと、番犬の多いこと。蕨の群生を発見一同歓声、大満足で飯山

現に、二俣地籍の第一期工事によって、この「谷川」の伝説的悲話のヒロイン、戦国武将三木秀綱夫人遭難の記念碑は、やがて水中に沈められてしまう。それは、大正十四年四十歳の折口信夫（釈迢空）が、

○をとめごの心さびしも　清き瀬に　身は流れつゝ　人こひにけむ

○いにしへや、かゝる山路に行きかねて、寝にけむ人は、ころされにけり

と歌った哀切の谷である。この歌の「清き瀬」の記憶も徐々にうすらぐ、うすら寒い文明の退廃現象を、「自然破壊」という「建設」の名によって見せつけられねばならない日も遠くはない。「寝にけむ人」ならぬ、渓谷自体が殺される運命にあるのである。

≪昭和二十二年からはじまった、ウエストン祭記念山行の道が、今こうした危機に瀕している事実を大方はどうお考えになるのであろうか。≫

周知のように、文明というものは、人間の安全を求める心から生れて来た。その意味では、機械文明の壁を積み重ねることによって、多くの危険を遠ざけようとする、関係機関の意図もわからぬではない。だが、奥深い自然の山懐にコンクリートの索漠たる壁を作る以外に、安全確保のミチはないのだろうか。しかもそれによって、わずかに残された自然の美しさも、うるおいも、味わいも、ひいては人間の愛も友情も、同時に遠ざけねばならないとしたら、文明とはいったい何なのだろうか……

ひとたび破壊された自然は、永遠にもとのままの姿を取りもどすことはできない。だが、たとえ中途であっても、それ以上を食い止めることはできる。たとえ経済優先、観光優先の誤まれる繁栄の中で、自然美にさえ不感症になってしまった人間であっても、一度その過失に気がついたならば、それはできる。もしそれも不可能だというなら、そんな心貧しい、見せかけの繁栄など、もう御無用に願いたい。

そして、現代が失ってしまったものを、自然の内懐で取りもどしたいと願う多くの人々のためにも、再度自然のありようを壊すことだけはやめて貰いたいのである。

「島々谷川」を遡る徳本峠への径は、数少ない「自然の味」を味わう意味でも、是非今のままの姿で残しておきたい、古き名残りの渓谷の景勝なのである。

（信濃支部）

自然保護情報

駅四時半着、網蔵先輩の企画に感謝、片岡講師には、本に書かれてない話の面白さ、興味津々たるものでした。次回は雪の斑尾高原で滑りたいものと夢を託して……。

（山水会　宇津力雄）

（参加者）講師　片岡博、企画　網蔵志朗、高田　岩堀　栗原　網蔵ジュニア　進藤　宇津、同行　田中　小島

第三回山菜山行に参加して

去る六月九日（土）午後四時、ほぼ定刻土樽国鉄山の家に着く。

東北の方から参加したのは、私一人でしたが、昨年、福島支部で行われた現地小集会の時に、参加下さった折井さん、内海さんのお二方にお会いできたことが、ほんとうになつかしかった。

夕方からはじまった懇親会には、山菜ばかりのメニューが十数種、煮物あり、和えものあり、ひたしあり、次から次へと箸がいそがしい。はじめて食べたマタタビ、アケビの葉のひたしは、私の口にも合っておいしかった。

地酒がほどよくまわって来た頃、懇親会ムードは最高潮。

明けて六月十日（日）。昨夜、地元会員の神主(?)のお祓いがきいたのか、天気良し、視界良し、山登りする者にとって、これほどありがたいことはほかにない。

元橋登山口から、平標小屋迄のコースはかなりの急坂で、きつかったが、平標小屋にたどり着いたとたん、それがいっぺんに吹きとんでしまった。展望がすこぶる良好。山頂付近に、残雪の仙の倉山が迫ってくる。一方、反対側には、まだかなりの残雪が太陽の反射で光っている、苗場山方面の山も、さらにすばらしい。

ここから山頂は、もう一息だ。途中の、シャクナゲの群落地は、実に見事な花盛りであった。

山頂はもちろん、登山道も、全然汚れていないこと、ゴミがないことに非常に感心させられた。

午後二時頃迄には、全員無事元橋登山口に下山する。ここでもまた、地元会員による、山菜の天プラ、味噌汁、冷めたい罐ビールの接待である。

いやあ、飲んだ、食べた。楽しかった山菜山行も、いよいよフィナーレである。

最後までお世話下さった、JAC会員である山の家の高波さんはじめ、地元会員の皆さんには、ほんとうに感謝の念でいっぱいです。

（福島支部　寺島昭一）

東西南北

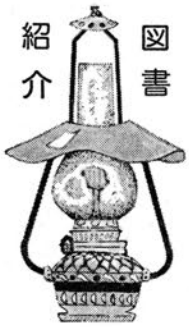
図書室便り――

閲覧室に飛騨高山の調度品

図書室に木製のすばらしいライティングデスクが入りました（写真）。飛騨の匠の伝統工芸の再現を目指す高山の家具店に特別注文し、扉に日本山岳会・JACマーク・年号等を彫り込んだ、落着いた雰囲気のものです。図書室にお越しの節はぜひ御鑑賞下さい。

なお、購入費には、故町田立穂氏御寄贈の図書の一部を、昨年度の山岳図書交換会に出品販売させていただき、その折の売上金を充当し、故人の御寄贈と云う形にさせていただきました。（目立たないところに「町田立穂氏寄贈」と彫ってあります）**図書委員会**

図書紹介



二つの遺稿・追悼集

いま頃紹介するのはあまりにも時間がずれていると思われるかもしれないが、せせこましい時間の観念や時の流行とは全く関係のない本なので、遅ればせながら次の二点を。

（大森久雄）

写真集『大地の詩』　阿岸充穂

会報三七三号、「山岳」七十一年・七十二年合併号に追悼が出ているのでご記憶の方も多いと思われる故阿岸充穂氏の遺稿写真集。阿岸氏は一九七六年六月四日、写真撮影のためチャーターした小型機のプロペラにうたれて急逝された。「大地の詩」のタイトルで、アメリカの西部とアラスカを中心とする、大自然の美と迫力をライフワークとして写しとろうとしていた途中の事故であった。残された数千枚のフィルムと撮影データ、本人以外には見当のつけようもない写真集構成の断片的なメモなどをもとに、常人の耐えられる限度を越えた未亡人の心労と苦難の末にまとめられたのがこの写真集である。モニュメント・ヴァレー、デス・ヴァレー、アラスカの氷河とオーロラなど、二科会初出品初入賞という恵まれた資質の阿岸氏が心に刻みこんだ、自然を超越しながらまさに自然そのものである景観が一一二頁、五七点のカラー写真にまとめられている。白川義員氏の撮影助手をつとめたこともあって同氏の影響下にありながらも、独自の抒情性をたたえた写真は、その無残・無念の最期と重なってみる人の心に一種透明な世界を現出させる。串田孫一、吉沢一郎、秋山庄太郎、白川義員氏の追悼と、アンセル・アダムスの序が付いている。写真構成・菅野梅三郎ほか。

昭和53年6月4日　日本カメラ社発行　定価一二〇〇〇円

蒼い星　安川茂雄追悼文集

山の、特に山の文筆の世界を縦横に歩きまわった安川茂雄氏の追悼文集。井上靖、石原慎太郎、菊村到、小松伸六、福田宏年氏ら文学関係、佐藤久一朗、佐伯富雄、澤村幸蔵氏ら山関係、その他編集

出版等ジャーナリズム関係の知人友人たち75人がそれぞれ安川氏との交友を語り、巻頭に遺影一葉と自筆遺稿未発表詩三篇、巻末に著作目録を収めたもの。前記各氏の短文から、せわしなく動きまわって急逝した安川氏の多面的な姿が浮かびあがってくる。出色の追悼文集。一周忌に遺族から関係者に寄贈された。

昭和53年10月23日発行　非売品

イランの山々と
――イラン帝国
親善登山隊報告

国鉄山岳連盟が創立二十周年を記念して一九七七年六月に、イランと合同で行った親善登山記録である。本書にも述べられているようにダマバンド山には日本から多くの人々が入山している。しかし国鉄山岳連盟が登ったその他の山域、特に南部ザクロスの山々については「イラン山岳協会でもまだ登山の対象としては入山していない」と言うことであり、珍らしい記録である。この中で山頂に祠があったと記されているが、どんな宗教のものか、現在も信仰の対象となっているのかなど、偶像を拝さないイスラム教徒が大多数を占める国の山であるだけに大いに興味をそそられるところである。

この山行でもう一つ注目すべきことは、イランの女性が異教徒のしかも異性と共に山に登ったことである。これはイスラム圏の女性にとってはごく限られた一部の人々にしかできない行為である。またイスラムの戒律が厳しさを増したイランでは、以後多分あり得ない貴重な体験であったと言える。そう言う訳で彼女達の行動、意見、社会的に占める地位がどんなものか、もう少し詳しく述べられてあると、さらに特色のある記録になったのではないかと惜しまれる。「この記録は単にイランの山のみでなく……」とあるだけになおさらその感が深い。

なお文中クーシャーと書かれている箇所があるが、この場合シャーは固有名詞であるし、日本でもかなり一般的な単語になってきたのでそのままでもよいが、クーは山と訳した方が良いのではないかと思う。従ってMt.シャーの部分もシャー山と統一した方が読者にとって、より一層わかりやすいと思われる。

昭和五四年三月一日　国鉄山岳連盟発行　一一四頁、写真多数　非売品　（泉久恵）

キシュトワールへ

学生部

今夏、学生部は、第六次海外登山隊を、四たびインド・ヒマラヤへ送ります。

目指す峰は、キシュトワール・ヒマラヤの、英語名で「小鎌の月」と表現されるシックル・ムーン（Sickle Moon、六五七四米）および屏風のようにそそり立ち宇宙を動かし創造する神の山ブラマー（Brammah、六四一六米）です。

両峰ともすでに、シックル・ムーンは一九七三年インド隊（隊長・G・N・タンカー）により、ブラマーは同じく一九七三年イギリス隊（隊長・C・ボニントン）により初登頂が果されています。

しかし、新しい、より困難なルートからのこれら魅力ある峰への登頂は、私達を魅了してやみません。

計画の概要は、次に記すとおりです。稚拙で未熟な若き隊ですが、学生部活動のバックボーンである「自由で豊かな登山の創造」を期し、懸命に山登りに取り組んでいきたいと思います。

会員の皆様のご指導、ご鞭撻よろしくお願いいたします。

＜計画の概要＞

(1)隊の名称

一九七九年日本山岳会学生部インド・ヒマラヤ登山隊。

(2)隊の目的

インド、キシュトワール・ヒマラヤにおける登山活動。

①シックル・ムーン峰（六五七四米）の未登の南東稜からの登頂

②ブラマー峰（六四一六米）の未登の北東稜からの登頂。

(3)隊の構成

隊長・伝田　克彦（東大スキー山岳部OB）、隊員・竹中　昇（早大山岳部OB）、駒宮　博男（東大）、鈴木　章（東洋大山岳部）、宮本　明男（芝工大山岳部）、秋本友紀（東京農大山岳部）、大林一成（東京農大山岳部OB）、早川　晃（東洋大山岳部）、芳賀成明（駒大山岳部OB）、医療係・赤須　孝之（東大スキー山岳部、医学部五年）以上十名。

(4)隊の行程

八月二日、先発隊（竹中以下四名）日本を出発。

十二日　本隊（伝田以下六名）日本を出発。

十四日　ニュー・デリーを出発。

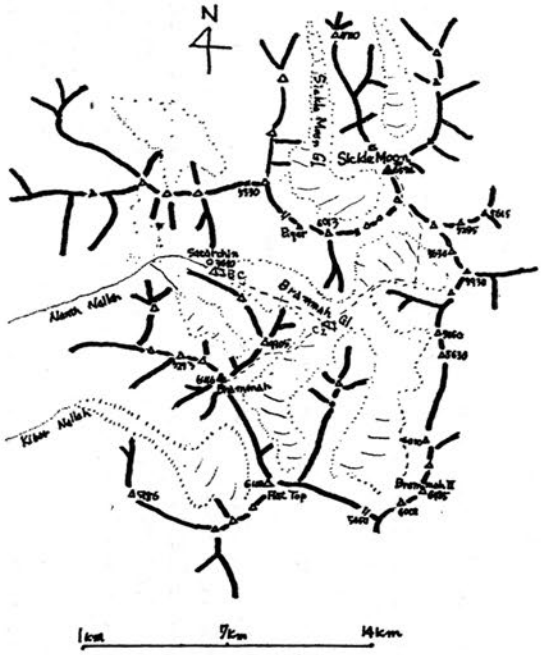
二十日　ナント・ナラ源頭部サッタールチンにBC設営。

二十一日～十月二十日　登山活動（約六十日間）。

二十五日　BC撤収。

三十一日　ニュー・デリーに帰着。

十一月五日　ニュー・デリーに



て登山隊解散。

(5)登山活動

前半約三十日間で、ブラマー、シックル・ムーン登頂ルート共通のCⅠをブラマー氷河上約四千米地点に設営し、未登の北東稜よりブラマーの全員登頂を目指す。

後半約三十日間で、未登の南東稜よりシックル・ムーンの全員登頂を目指す。

なお、時間的、体力的な余裕があれば、フラット・トップ（Flat Top. 六一〇三米）、ブラマーⅡ峰（六四八五米）の登頂も試みたい

高所ポーターは雇用しない。

(6)留守本部

事務局・日本山岳会内

本部長・菅沢豊蔵（学生部担当理事）

副本部長・嵯峨野　宏（学生部指導委員長）

（竹中　昇・記）

お知らせ

第22回紅葉会案内

ことしの紅葉会は伊豆半島の中ほど原生林に囲まれた出湯の里、天城湯ヶ島温泉で開催いたします

期日　54年11月10日（土）～11日（日）

場所　静岡県田方郡天城湯ヶ島町国民宿舎　木太刀荘

募集人員　40名（支部員別）

満員になり次第締切ります。

参加費　六五〇〇円（宿泊費、懇親会費、翌日の弁当代・雑費）

集合　11月10日午後四時木太刀荘

日程等　第1日(10日)　入室・入浴・懇親会

第2日(11日)A班　仁科峠（にしな）～猫越（ねっこ）岳～猫越峠～滑沢峠～旧天城峠～天城峠の15・6km、伊豆に残された唯一の原生林の中の山道。ブナ、リョウブ、ヒメシャラ、ミズキ、アセビなどの起伏の少ない静かな美しい山道です。

B班　天城峠～旧天城峠～バス道の約6kmぐらいの行程です。

その他湯ヶ島町には浄蓮の滝、猪村、昭和の森など見学場所があります。

・木太刀荘までの案内

東海道本線・新幹線の三島駅下車　伊豆箱根鉄道に乗りかえて終点修善寺駅下車、下田行か湯ヶ島温泉行のバスで湯ヶ島温泉バス停で下車、徒歩で7～8分木太刀荘（猫越川沿い）湯量も豊富でいつでも入浴できます。

申し込み先

静岡県田方郡函南町塚本九七三―二

山口　亮

電話自宅　05597-8-2673

勤務先　05594-8-1061

申し込み次第案内さしあげます。

〈静岡支部　山本朋三郎〉

第三八三回　ルーム小集会

北海道　日高の山と谷を語る会

日時・9月12日　午後6時半より

場所・本会ルーム

会費・五〇〇円

講師・林和夫氏

講師は北大山岳部の出身で半世紀に渡り日高の山々に親しまれた方です。日高山脈は大山脈であるにもかかわらず、語られる事の少ない地域です。

貴重な機会ですので、憧れの北の山である方も、又思い出の北の山である方も、ふるってご参加下さい。

（集会委員会）

●追　悼

終身会員松井久之助氏

梅雨空のさ中六月二十五日心不全により死去、七十四歳であった。明治三十八年九月十四日群馬県太田市新井家の人として誕生、県立太田中学卒業の上住友銀行に入社、住友山岳会に入会近畿の山山を若さに任せて登り歩いた。同山岳会（会長故大島堅造氏）の出した名著「近畿の山と谷」には当初より参画、自ら「比良」「南紀の山々小雲取大雲取」等を執筆紹介、また旧R・C・Cにも参加、その機関誌R・C・C三号（昭四・十一）には「小谷付近」（雪の記録）、四号（昭六・三）に「早春の薬師岳と黒部五郎岳」（昭五・三）を発表している。このあと松井家の人となり、R・C・C五号（昭七・十二）には「人形山と三ケ辻山」（金沢白川昭六・四）を執筆、その頃故加納一郎氏が主宰発刊した雑誌ケルンの同人となり、三号（昭八・八）に「内蔵の助平」、四号（同九月）に「笹ケ峰と六甲の小屋」を遺しているが、この頃から自らの山行記録や雑感の発表をなぜかしなくなってしまった。

昭和五年八月本会に入会（会員番号一二二二）関西支部創設当時（昭十・十）中原・津田・三木・別宮・高橋健・水野祥氏と協力、ルーム開設後は会計委員として支部運営に携った。晩年は読書にあけくれ、趣味としての絵画観賞に一家をなしていた。

葬儀は六月二十七日、梅雨前線そぼ降る内、近親友人達相寄りしめやかに行われた。私も相共に支部役員として親しく動いたことや、故足立源一郎氏を数人で囲んで騒いだ日のことなどを思出し乍ら、その霊前に立ち心から冥福を祈った。

（富田健一）

大野俊夫評議員

（会員番号一五〇〇番、行年六十八歳）

今年五月頃より体調が悪いとのことで、入院加療中であったが、ひたすらに病気の快癒を信じてきたのに、七月三日正午に急逝との悲報に接し強い衝撃を感じた。

六月中旬に恒例として開催される有志閑談会には、毎回出席されていたが、本年はその温容に接することもなかったので、ひそかに心配をしていたところであった。

大野さんは昭和八年十二月に本会に入会されたが、外務省勤務として海外在勤も長く、パリ駐在の頃には特に多くの会員が御世話になっていた。

退官後は、山想会（法大山岳部O・B会）会長として後輩の指導に、また本会においては評議員として或いは自然保護委員会のメンバーとして、深い教養と国際感覚をもって常に有益なアドバイスをされて、現在本会の運営においてその重責を担っていただいていた。

大野さんは中学時代（現在の両国高校の前身）から法大山岳部の登山に参加が許され、卒業後は当然の様に法大山岳部に入学と云った方がよい程に、山に情熱をかけてきた。今日に至るまで純粋に山を愛し、山仲間から敬愛されていたが、今は安らかな永眠を願い、御冥福を祈るばかりである。

（折井健一）

会務報告

6月理事会

6月11日午後6時30分　本会ルーム

▽出席者　折井、渡辺副会長、宮下、中島、飯野、高本、菅沢、岡沢、大森、山口、越田、川上、高橋、嵯峨野、中村各理事、金坂、小原（晴）、村木各評議員、中川各理事、大塚評議員

委任　西堀会長、鈴木、小倉、

▽議案

⊙信州大学ガネッシュ・ヒマールⅢ峰登山隊に対する推薦状交付の件　（宮下）

信大学士山岳会東京支部によるガネッシュ・ヒマールⅢ峰登山隊（一九八〇年プレ）より、推薦状交付方依頼があったので都岳連へ出願する　承認

⊙日本山岳会学生部キシュトワール・ヒマラヤ（シックルムーンとブラマー）登山隊の派遣について　（菅沢、嵯峨野）　承認

⊙神憲明氏の映画「穂高讃歌」を実費生フィルム代にて購入する件　（宮下）

同映画は図書委員会で管理、保管する。　了承

⊙友野清氏より明治44年撮影の故嘉門次氏の写真寄贈の申し出あり　（望月）　受入れ了承

▽報告事項

⊙自然保護　（折井）

・大台ヶ原自然保護に関する件

5月25日に奈良県庁を訪れ、本会会長名で奈良県知事へ要望書を提出し、本会としての活動に一応の区切りをつけた。

・鳥海山の自然保護について

鳥海山にロープウェイを建設する動きがあるので、今後、監視を強め、対応していく。

⊙山研　（高本）

・5月の山研利用状況について

5月3日にオープンしたが、前年5月の利用状況より、倍近くの利用者があり好調である。今後も利用者の増加をはかるよう努力する。

⊙婦人懇談会　（山口）

・恒例のビール・パーティについて

8月18日午後4時から本会ルームで開く。多数会員の出席を期待している。

⊙医療　（大森）

・登山医学ハンドブックを作成するため、ただいま検討中である

⊙青年懇談会　（高橋）

・ドイツ山岳連盟（交流登山）への若手メンバー派遣の件

8月中旬に5名ほどのメンバーをドイツへ派遣する計画で、準備を進めている。

⊙高所　（川上）

・雪崩をテーマに6月中に講演会を開催する計画である。

⊙科学　（中村）

・6月12日に今西前会長の「私の山と学問」と題した講演会開催

・8月11・12日に鳥海山を舞台に「高山植物その特徴と背景」をテーマに会合を開く。

・図書　（越田）

10月27日に山岳図書交換会を開催する。

・故町田立穂氏の寄贈図書を処分した資金で、本会図書室に調度品として、飛騨高山の手作りのライティング・デスクを購入した。

ルーム日誌（54年6月）

5日（火）山菜勉強会
6日（水）山研委員会
7日（木）山日記編集委員会、常務委員会
11日（月）理事会
12日（火）婦懇委員会
13日（水）婦懇研究会
19日（火）財務委員会
20日（水）三水会
21日（木）婦人懇談会
25日（月）図書委員会
26日（火）自然保護委員会、婦懇研究会
27日（水）高所登山委員会
28日（木）自然保護委員会（穂高の映画と懇談会）
29日（金）科研講演会
30日（土）学生部集会

今月の来室者五七一名

会員移動（6月）

支部変更

五六〇八　早坂礼吾（宮城へ）
八二五四　打矢道雄（秋田へ）
八五一四　轟新一郎（信濃へ）
八三三九　鈴木昭一（静岡へ）

代表者変更

五三五三　新日本製鉄（株）八幡製鉄所山岳部　安島定雄

呼称変更

七〇四九　北海学園大学山小屋文庫→北海学園大学山小屋管理委員会

姓名変更

四九八三　富田美知子→織田沢物故

六〇五　直木重一郎（54・6・12）

会員番号変更

七七〇一　前嶋信　五六六〇へ

ルーム購入収支報告

新ルーム購入の収支は，本会の昭和52年度，53年度の決算報告中に，またがって記されているため，お解りにくい点もあろうかと思い，ルーム購入の収支だけをぬき出してご説明します。（昭和54年3月末現在）

なお『山岳』73年の報告中に掲げた数字は，53年9月末のものであり，今回の数字が最終的のものとご承知下さい。

〔収　入〕

募金	会員から	¥17,371,410
	法人から	13,580,000
銀行借入金		40,000,000
保証金返戻分		7,314,000
ルーム基金積立金		1,457,000
雑収入（預金利息）		84,933
計		¥79,807,343—Ⓐ

〔支　出〕

建物購入費	¥72,720,170
什器備品費	3,385,470
引越費用	1,154,942
雑品購入費	204,612
募金事務費	1,690,133
計	¥79,155,327—Ⓑ

Ⓐ—Ⓑ……¥ 652,016 をルーム基金積立金（別会計）として，将来の修理等のため備える。

（説明）1. 当初銀行からの借入金は50,000千円を予定したが，最終的には40,000千円ですみ，会の資産構成はよくなった。（『山岳』73年の報告を修正します）

2. 募金事務費中にはオープン・パーティ（2回）の経費を含んでいる。

3. 会員からの募金額は最終的に"山"403号記載の金額より約¥82,000少なくなっているが，その理由は申込みされたにもかかわらず，実際に入金のなかった会員が数名あり，それを補正したためである。

以上をもってルーム募金関係のすべての報告を完了させて頂きます。

（望月・高遠）

●お知らせ――（自然保護委員会）

自然保護全国上高地集会開催

・日時　9月29日(土)・30日(日)

・宿泊　山研、西糸屋

全国各支部から会員のお集りをいただき、恒例により上高地集会を催しますので、自然保護に関心のある方は積極的にご参加下さい

昭和五十四年八月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　西堀栄三郎
編集代表　岡沢祐吉
電話東京(261)四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

■日本を代表する山岳写真家が撮り切った
秀麗な山岳美！

日本山岳写真集団作品集

北アルプス

荒川紀一／内田良平／石橋睦美／白簾史朗／
竹ヶ原陽一郎／横山 宏／近藤辰郎／山下喜一郎／
水谷章人／岩橋崇至／三宅 修／尾白明夫／小森康行

絶賛発売中!! 定価8000円

造本体裁
●判型／A4判正寸（縦29.7cm×横21cm） ●表紙／特漉きクロス装
●内容／オフセット多色刷92点144頁・二色刷8頁・単色刷40頁，総頁192頁 ●カラー写真張りダンボールケース入り

実業之日本社 〒104 東京都中央区銀座1-3-9 電話(562)4311 振替東京1-326